

令和6年度 第2回 多摩六都科学館組合事業評価委員会 会議録	
日 時	令和6年11月6日（水）午前10時から午後0時15分まで
開催場所	多摩六都科学館2階201会議室
次 第	1 開会 （1） 開会挨拶 （2） 委員ならびに参加者紹介 2 議題 （1） 多摩六都科学館組合事業評価委員会の運営について ① 委嘱状の交付 ② 委員会の公開・非公開 ③ 委員長・副委員長の選出 ④ 諮問文の交付 （2） 第3次基本計画における事業評価の取組方針について 3 質疑応答 4 次回委員会ならびにワークショップ開催について （1） 次回委員会 （2） 評価指標検討ワークショップ 5 閉会
出席者	委員会：縣秀彦委員、佐々木亨委員、佐々木秀彦委員、岩穴口康次委員 田原三保子委員 事務局：保谷事務局長、豊田管理課長、小菊主査、内木主任、秋山主任 事業評価等支援業務受託者：有限会社プランニング・ラボ（村井代表） 指定管理者：高柳館長、福島 GM、伊藤総務 GL、矢野みらい創造 GL、 石井アテンダント GL、齋藤天文 GL、湯浅インタープリター GL、成田理工 GL、原自然 GL
決定事項	●
記録方法	発言者の発言内容ごとの要点記録
資 料	資料1 多摩六都科学館事業評価活動2024 工程表 資料2 多摩六都科学館 事業評価活動 評価の次なるアクションに向けて 「振り返りの場」（試行）活動レポート 資料3 「多摩六都科学館 第3次基本計画」評価設計案 資料4 多摩六都科学館組合事業評価委員会委員名簿（第10期） 参考1 「第3次基本計画」における段階評価について 参考2 「第3次基本計画」における事業評価の枠組みに係る中期目標 ならびに指標を検討する前に内部で協議すべきこと 参考3 「多摩六都科学館 第3次基本計画」計画体系→中期目標・指

	<p>標検討たたき台-1、たたき台-2</p> <p>参考4 「第3次基本計画」事業スケジュール案</p> <p>参考5 多摩六都科学館 第3次基本計画</p> <p>参考6 多摩六都科学館 メタ評価調査報告書～事業に直接関係しているスタッフへのヒアリング調査を中心に～</p> <p>参考7 多摩六都科学館 第3次基本計画策定 子どもの意見聴取 ヒアリングレポート 調査対象：継続的ユーザー</p> <p>参考8 多摩六都科学館組合事業評価委員会条例</p> <p>参考9 附属機関等の会議録作成に関する要綱</p> <p>参考10 多摩六都科学館組合市民モニター設置要綱</p>
凡例	<p>発言者の略記（長：事業評価委員会委員長、委：事業評価委員、館：高柳館長 組：多摩六都科学館組合、指：指定管理者、受：事業評価等支援業務受託者）</p> <p>以下会議概要</p> <p>次第1 開会</p> <p>（1） 開会挨拶 高柳館長、保谷事務局長より開会の挨拶</p> <p>（2） 委員ならびに参加者紹介</p> <p>次第2 議題</p> <p>（1） 多摩六都科学館組合事業評価委員会の運営について</p> <p>① 委嘱状の交付</p> <p>② 委員会の公開・非公開 本委員会は公開とし、会議録の作成方法は「発言者の発言ごとの要点記録」とする。</p> <p>③ 委員長・副委員長の選出 委員長は縣委員、副委員長は佐々木亨委員が選出された。</p> <p>④ 諮問文の交付 保谷事務局長から縣委員長へ諮問文の交付を行った。</p> <p>（2） 第3次基本計画における事業評価の取組方針について 資料1～資料3、参考資料について事務局から説明。事務局からの説明後、委員及び事業評価等支援業務受託者から補足説明。</p> <p>＜補足説明＞</p> <p>委： 参考3をご覧ください。</p>

これまでの評価は、目標と目標達成度がはっきりしていなかったもので、検証がしにくかった。さらに将来像や使命にどう繋がっているのかが読み取れなくて、何をもって成果としているのかが欠けていると思った。

私は、評価を受ける立場だったり、所管の各施設に評価を導入する立場だったりするが、事業評価というのは、目標が明確で、その目標に対して自己評価が妥当かどうかを外部の人たちに評価をしてもらい、現場の状況を共有してもらいながら、その評価結果を基に次の改善（Action）に向かう。このサイクルを作ると思う。

参考3にある第3次基本計画を見ると、使命と将来像があり、将来像は1から4まであって、それぞれに10年後のアウトカムがある。

今回提案するのは、10年後のアウトカムがすごく先なので、中間目標ということで5年後の目標を指定管理者と組合とでよく話し合っ、具体的に見出しただきたいと考えている。

中間目標に対する達成度を測るには指標が必要で、定量、定性どちらも必要だと思う。

中間目標及び指標をどう見出すかということになるが、材料は既にある。

参考3の2ページ目には指定管理者の公募時に提出された提案書から抽出した提案内容と組合側の要望を記載している。中期目標と指標を設定する際に材料として置いておかなければならないのが、今日の前段で説明のあった子どもたちのヒアリングレポートとかスタッフの振り返り、あとはメタ評価の報告書などである。

中期目標を設定する方法には考え方が二つぐらいあると思う。一つは各将来像の重点戦略に沿って一つずつ設定するという考え方。どちらかというと網羅的にやる。もっと細かくやるのであれば、各将来像に関わる個別の事業、担当業務を全部網羅して網羅的に中期目標を設定するやり方もある。これはとても大変だけれども、指定管理者の中でやっている職員の目標管理と連動させるのには楽である。私が所属する団体では、PDCAシートという指定管理者が提案した内容を全部網羅している目標管理シートを持っている。

もう一つの考え方は、例えば将来像1が二つの要素から成り立っているのであれば、中期目標も二つにするやり方。評価指標については、一つの目標に対して一つかもしれないし、定量的なのが一つで、定性的なものが一つかもしれない。まだ正解がないと思うので、皆さんで考えていただき、フィードバックしていただいたり、評価の専門である委員からも助言を得たほうがよいと思う。ですので、将来像1から将来像4までこういう作業が必要となってくる。

中期目標を立てるときに留意しなければならないのが、日々の実務や事業と結びついていること。一つの目標が一つの事業に結びつくかもしれないし、一

つの目標が複数の事業と結びつくかもしれない。そこが結びつかないと目標達成度などの検証に繋がらないことになる。

今のは内部の視点になるが、もう一つの視点は外である。構成市の関係者や市民などに対する説明責任という視点。外部の人への分かりやすさを優先すると、内部から見ると雑な評価になってしまうので、ここのバランスを気を付けなくてはいけないと思う。内部へは目標に対する成果や課題を自己評価し、検証できるレベルにすること、外部へは共感してもらえる説明責任として成立すること、この二つの要素が必要だと思う。

今後の流れとしては、先ほどのスケジュールより年内には中期目標、評価指標を何にするかを内部で検討に入っていただくのかと考えている。

受： 委員から説明があったが、提案の内容で進めてよいか。この他にも案があれば伺いたい。現場に疑問点があるといけないので、意見交換をしたい。なるべく堅苦しくならず、対話を重視した委員会にしたい。みんなで協議しながら評価の考え方、進め方、取組方を相談できたらいいと思う。

また一つ課題として挙げられるのは、段階評価を見直す必要があるかどうか。今までどおりで良いかどうか、あるいは段階評価をやめて、もう少し現場改善に繋がるようなコメントを外部評価の方からいただくことにしてくのか。構成市への説明責任を果たすためには段階評価があった方が分かりやすいということがあるので、皆さんで協議してご意見をいただけたらと思う。

委： 協議に入る前に評価をご専門とする委員にメタ評価をされた立場を踏まえて私の意見と食い違いがないか確認をしたい。

委： メタ評価を行っていて一番感じたのは、評価報告書が使われにくいスタイルだったということ。10年後のアウトカムの中間段階の目標に紐づいているかどうか、体系化しているところが少し弱かったと思うので、そのとおりだなと思った。決まったものをみんなに浸透させるのではなく、評価される側も言いたいことや解釈の違いなどがあると思う。評価報告書は、言葉や数字にした瞬間からかなりのものがそぎ落ちてしまうけど、そぎ落ちた部分に実は真実があったり、そこから拾えることも多くあるはずなので、協働型で対話しながら進めていく。この会議もまさにそのとおりだと思う。

委員がご説明のとおり、定量評価だけだと抜け落ちる部分が多いので、メタ評価では質的データの活用と呼んでいるが、そこも委員がご説明のような提案でやってもらえるといいと思う。

ですから私は、委員がご提案した枠組みはとても良いと感じた。

次第3 質疑応答

長： 専門家お二人の話は慣れていないとよく分からないので、まずは「評価」というのは誰が何のためにするかということを一回整理する。

「評価」というのは3種類あって、ここでの自己評価というのは、自己点検。自己点検の作業は当然やっている皆さんで個人評価も含めてそれぞれがやればいいこと。

二つ目の外部評価というのは、この会議では外部評価委員五人がいて、市民の代表・立場の方や他で活躍されている方がいて、アドバイスをすること。資料3の最後のページの一つ前に書いてあるように、私たち評価委員の役割は二つあって、使命や将来像などの達成状況を検証し、専門的な見地から外部評価を行うことと、科学館の未来のために現場だけでなく設置者に対しても助言を行い、それを反映してもらうことが役割である。

三つ目は第三者評価で、第三者評価こそが本当のエビデンスがある評価で、外に出ていく資料には私たちの単なる意見や感想ではなくエビデンスをつけないといけない。それが第三者評価であり、モニター調査や来場者調査、ヒアリング、インタビューなどである。この三つは明確に分けておく必要がある。

大事なことは、先ほど委員からも説明があったが、やったことをどう生かすかが一番大事である。外部評価委員の役割としては、専門的な見地から目標達成状況の検証や現場の困りごとを聴いたりすることもあるが、二つ目の設置者などに意見を述べるということ。外部や第三者からの意見というのは、設置者などには強いインパクトを与えるので、そういうことで我々を活用してくださいということですよ。委員の皆さん、そういう考え方でよろしいか。

自己点検のやり方などについてのアドバイスや現場の話を聴くことなどもするが、我々が取りまとめていくことは、設置者に対して助言、提案することを前提とする。そういう考え方でよろしいか。

委： そのとおりである。

長： 事務局から説明があったところについてのご質問、ご意見でも構わない。委員から提案のあったことについては、今日の会議で方向性を決めないといけないと思っているので、それを前提に30分ほど自由に議論、質問、意見でも構わない。

最初に質問だが、評価活動での組合と指定管理者は一体と考えてよいか。

組： 一体と考えてよい。

受： 補足すると役割は異なる。

指： 報告と相談と懸念事項をお話させていただく。一つ目は、現在来年度の事業計画を作成しているが、その中で年二回の休館日を職員の出勤日としており、ワークショップなどの事業評価活動に上手に使えればと思っている。まだ最終決定ではないが、そんな計画を立てていることをご報告する。

もう一つは、我々は昨年度にコンペで指定管理者を取らせていただいたが、基本的にそのときの提案書に沿って事業を行おうとしているが、柔軟に考えて

いただければというふうに思う。提案書の中で収支計画を立てているが、その収支計画によると来年度から順次指定管理料を上げていく収支計画を立てていたが、それが現実的に厳しいところがあり、提案書どおりの事業実施は難しい可能性があると思っている。

それから評価について、段階評価とPDCAを回す評価をどう役割分担するのか。私の中では目的が違うと思っている。段階評価は評価として分かりやすい側面があり、例えば組合が構成市に説明をする際に非常に分かりやすい。指定管理者側としてもコンペの評価にインセンティブをいただけた。このようなことには段階評価は非常に使いやすいと思う。

一方で、PDCAを回すための振り返りを行うと、評価が高いということは改善するところが少ないと。一方改善点があることを前提で考えると、評価が低くて良いのではないかというような印象を持ってしまうのではないかという懸念がある。このあたりを定量的評価と定性的評価で上手に整理ができれば良いと思っている。

全く違う側面として、予算とマンパワーの問題についてである。振り返りの中で新たな取組が必要になった時に、その予算とマンパワーをどう原資から引き出すかという問題も出てくると思う。新たなことをやるのであれば、今までやってきたことの中でやめることを作らないと、そこに人とお金と時間が割けないという問題になるのが気になるところである。

最後に第三者評価について、経験上少数意見をどう扱うかが問題である。少ない意見を取り上げた結果、誤った方向に進んでしまうということがあるので、少数で声の大きい人がいるとその意見に全体が流されてしまう懸念があると考えた。

長： 先ほどの発言を少し修正する。第三者評価というのはおっしゃるとおり、個人の意見としてバイアスがかかったものをそのまま活用するのは極めて問題であり、それは正しい評価ではない。モニターというのはたくさんデータを取って解析して、有意であるか、有意でないかということを判断しなければならず、個人の意見、クレーマーの意見で動くようでは良くない。

ところで、年次報告書は作っているのか。どれだけ人が来たか、何にどれだけのお金をかけたかが記載されているデータはあるか。そういうデータこそが、お金を出す人たちや我々にとって重要なデータブックである。

組： 組合には予算書、決算書がそれぞれあり、その中の一部に指定管理料がある。指定管理者は、主に指定管理料と利用料金収入を原資として管理運営を行っていただいている。科学館の管理運営の収支報告は、事業報告書の中でされている。

長： 分かりました。

指： 少し言い忘れていた。第三者評価の対象者について。科学館に来られたことがある方、科学館の存在すら知らない方、科学館を知っているけど来たことがない方がいるので、どこを対象に第三者とするかというのも設計上とても大切であると思う。

受： 委員長がおっしゃっていた第三者というのは、外部評価のあり方として外部評価委員会という内部評価の外部評価があって、更にその枠のもと外の第三者の観点から評価するというものもあるということをおっしゃっていたのか。

長： そうである。

受： そういう観点からの評価も今回の事業評価委員会ではやった方がいいのではないかという説明があったということか。

長： そういう意味で言っているわけではない。非常に偏った個人の意見かもしれないので、みんなでよく議論していきたいと思う。

指： 第三者評価は、多少仕事が増えると思うが、あった方が良いと思っている。ただ、しっかり設計しないと我々をミスディレクションしてしまうことになりかねないので、慎重さが必要であると思う。

委： 今おっしゃっていた第三者評価は、市民モニターもその一つですか？

受： 市民モニターは違う。自己評価の一環として定量ではなく、定性的成果について外部評価していただいている。

委： それでは、今議論している第三者評価って何か。どういう方法で取ることを想定しているのですか。

指： 方法は全く分かっていないが、単純に公正公平なエビデンスかによって利害関係のない方から受ける評価という意味で言っている。

長： たぶん使命や将来像や重点課題を評価する時に必要になるかもしれないということで、必要がなければ必要がないということですね。

委： 今言ってたような市民の統計的に正しい評価の取り方をしてみたいなのは、いろんな評価委員会でも取り扱っているが、外部評価委員会がそれを市にやってくださいと依頼している感じで、さらにもう一つ枠があるわけではなく、外部評価委員会の責任において、それも解釈して判定するというような打ち付けもあるのではないかと思います。必ずしももう一枠やらなくても良い場合もあると思う。それを本当にやるようになったら真剣に検討したら良いと思う。

長： 必要に応じてですね。

組： その辺については、中期や長期の事業評価の時に、圏域市民や未利用者を対象とした評価をしてきている。

長： ありがとうございます。外にどう出すかという議論とは別に、中で評価はこうやってほしいって、当然意見があると思うので、遠慮なくご意見をいただきたい。

指： 現場としては目の前の直接コミュニケーションを取った人たちの行動変容を成果として考えていて、利用者からも評価を受け、その成果を達成したことを自己評価して、外部評価も A+をもらっているが、最終的に人が来なきゃダメみたいな印象ばかりが残っている。運営上の人を呼ばないと続かないという課題と、目の前のお客様に良いものを提供して科学リテラシーを向上させることも分かっているが、どこかで切れている。指定管理者と組合で対話をし、お互いに理解しながら実施事業の目標値の設定や報告の仕方などを擦り合わせていくことが必要であると思う。多分やり方としては委員が提案された内容で、みんなが日々やっていることが繋がっていくような点で、私たちにとっては分かりやすいと思う。決めていくときに対話がないと、それぞれのところが立てたのがバラバラになって、最終的にまとめてみたときにみんなの頑張りと最後の評価が繋がらない結果になってしまうのではないかと感じた。

長： とても大事なポイントだと思う。我々委員の立場としては、そういう現場の皆さんの単に数字だけでは表せない企画意図や改善策などについて十分な意見交換をすることが大事なことであって、そういうことに評価委員会の時間を使えと一番良いと思った。

しかし、年に2、3回ぐらいの会議だとなかなかそのようなやりとりにならないので、個人的な意見としては、学会や研究会等で発表をして周りから評価をされたり、研修の時間を業務時間や予算に位置付けておかないと、現場の皆さんのモチベーションや自分がどうかという評価は上司だけの評価ではなかなか難しいところがあるので、そういうことも事業の中に加味されてもいいのではないかなと思う。

委： 今の指定管理者の話を聴いてまさしくそうかなと思った。肝心なのは将来像1を実現するというのはとても抽象的なことであるが、何か目標を決めて、こういうことをもって実現したということにしようという決めごとである。

将来像1では10年後のアウトカムを決めてるから、それを達成するには具体的にどういう目標っていうのを議論して決め、達成度を測る指標はこういうので説明していこうっていうことを指定管理者と組合が話し合っ、みんなが納得する落としどころを見つけてほしい。アクセスの改善などできないような目標は目標にしない方がいいと思う。

長： 皆さん、その他いかがでしょうか。

指： これらの評価をする際に、こういうことをやってほしいみたいな要望が出てきた場合、それを実現するためには条例や規則などを変える必要が出てきた時は、組合は積極的に支援をしてくれると考えてよいか。結構それが壁になっているところも見受けられる。

組： 組合の立場としては、構成市の財政状況等も十分に考慮する必要があるの
で、すぐに取り掛かれるものと、慎重な議論を要するすぐには取り掛かれない
ものがある。なるべく支援をしていくつもりだが、こちらの事情も十分に理解
していただきながら一緒に考えていきたい。

長： 時間が少なくなってきたので、委員の皆さんにはまとめに近いことをお願い
したい。

委： 私も2年前の3月まで5年間、指定管理者で市の公共施設である市民活動支
援センターでセンター長をしていた。市と指定管理者との関係性、指定管理料
はなかなか上がるものではない、という現実も分かっている。それを受けてど
ういう事業展開をするか、前例踏襲なのか、新しいことをするかの判断はとて
も悩ましい。新しいことをやろうとすると人手やお金が必要になる。でも、限
られた資源の中でやれることしかできないという制限がある中で、実績の積み
方やその見せ方が従来どおりだと訴えるものが少なく難しいと感じた。

なので、評価が良い方向に力を与えることができれば、私に関わった意味が
少しはあるのかなと思って話を聴いていた。評価というのは本当に難しく、私
も勉強したいと思っているので、一緒に学びたいと思う。

長： ありがとうございます。続いて次の委員をお願いします。

委： 将来像、重点戦略、長期的なアウトカムが出ているが、最終的にそこにいる
人たちがどういうふうにするか。活動のアウトプットとアウトカムをどうい
うふうに繋げていくかが非常に重要なのかなと思う。

とはいえ、組合の予算の問題などもあるので、その擦り合わせをどうい
うふうにできるのか。それがないと、現場のそこがうまくできていない限りは評
価できてそれが正しい評価なのかどうかというところがある。こういう場で
どれだけ皆の意見を調整できるかが必要だと思った。

同じ評価の結果でも誰に見せるかによって、どういうふうなアウトプットの
形にして出していくのか。例えば民間企業だったら経営陣に報告するのか、顧
客に説明するのかで内容は違ってくると思う。そこは分けて出ていった方が、
特に圏域市民とかに理解を得るのであれば非常に必要なのかなと思う。目標と
して幅広く大きな市民の方を巻き込んでいくのであれば、見せ方はいろいろ考
えていいかなと感じる。

長： ありがとうございます。

今日具体的に委員からご提案された参考3をご覧ください。

基本計画は10年ですが、「評価は中期目標を立てて5年で行う」という提
案に対してご異議のある方はいらっしゃいますか。（異議なし。）この方向で
進めることでよろしいでしょうか。

そうすると、ゴールや指標をここで作らないと進まないし、評価にならないわけで、個人的な意見として指定管理者は指定管理者として業務を受けているベースがあって、プラスこのビジョンや使命を見ると、それを超えて何かやらないと達成できないようなものがある。本日ご提案いただいた委員にもう一度詳しく説明を聴いてと思うが、目標を立てる時は誰がどの立場の人が何をするかを明確に書いておかないと誰の責任なのか分からなくなってしまう。指定管理者が取り組む目標は指定管理者として受けている目標だから先ほどのお話のように来たお客さんに対してどうか主になるのは当然と思う。それが全部ではないが、主になると思う。

一方、第3次基本計画で掲げている部分は、例えば「誰もが科学の楽しさを体験して」の「誰も」っていうのはここに来る人以外の圏域の子どもたち全員となるともう少し違う視点でやらなければならないので、指定管理者の意見を聴きながら組合が中心になって、または外部評価委員が参加して何かやっていくとかしていかないと進まないと思うので、そういう誰が何のためっていう部分は、どこが責任を持ってやっていくかを明確にしておいた方がよい。

それによりさっき委員が言われたように、誰に向かって誰のためというところが明確になっていかないので、もしかすると分割してやる必要があるかもしれないし、時間がかかるかもしれないので検討いただきたい。

具体的な指標や目標はいつまでに作らなければならないか。

組： 現時点の予定では「資料1 工程表」で示しているとおり、令和6年12月までに目標についてのワークショップを行い、来年1月ぐらいまでに指標、目標が決まれば2月以降には令和6年度の事業評価の試行を始め、3月に開催予定の評価委員会で試行案の検討を行いたいと考えている。

受： 付け加えると、今年度はある程度決めるが、来年度の前期でも見直しをかけられるので、あまり急いでやるというよりは試行をしながら、段階的に進めていく予定である。

長： ご提案いただいた委員よりここまで何か気になることがありますか。

委： 中期目標や指標を決めたら、次に誰が主にやるのかという具体の取組が出てくる。指定管理者、組合が主語となる場合もあるし、指定管理者と組合が連携しないと成り立たない場合もある。実現するための取組内容が導かれ、それが年度毎の事業計画の大事な柱である。組み立ての理解はしているので、達成するためには誰がどうやるかを含め、皆で考えていかなければならないと思う。

委： ご提案された委員に何かご質問はあるか。

受： 可能であれば評価委員の方たちにはワークショップの出席をお願いしたい。ご助言をいただきながら現場が進めることができれば、もう少し分かりやすくなる気がするので、ご相談したい。現場も安心する。

委： これから行うワークショップはこの館の評価のあり方をどうするかを決める再定義に近いようなワークショップだと思う。とても大事な位置づけだと改めて思った。そういうふうにセッティングがここまでできたのも事業評価等支援業務受託者や事務局の努力をととても感じているので、ぜひ成功させてもらいたいと思う。

自分たちが決めた目標の中で、どこにターゲティングを与えるか。それってもう価値ですから。評価というのは価値を引き出すこと。自分たちがこの価値を今引き出したいというものを選ぶしかないと思う。自分たちの意思で選んでいくことだと思う。評価って答えがあるものに自分たちの枠組を合わせるのではなく、自分たちの出したい価値を選ぶ作業だと思う。だから、ある意味この対話をするプロセス自体が評価だと思う。評価って出てきた数字や最後のテキストだけが大事だが、そういう意味ではこういうような対話をしている時間が評価に一番大事な時間である。まだギクシャクしているかもしれないが、これからワークショップをやりながら継続していくと、きっと良い方向になるのではないかと改めて思った。

最後に一つ、メタ評価でも使って、この資料の中でも出てきている「組織強化」という言葉について、別に組織を管理したいという意味ではなく、評価という活動をとおして皆さんがエンパワーメントされて、生き生きと生活や仕事ができるという意味の「組織強化」ということである。ちょっと勘違いしないであっていただければと思った。

一番言いたかったことは、このプロセスこそが評価であるということだと思った。

長： ありがとうございます。次第2の議題を受けた質疑応答はここまでとする。ここまでで館長、何かコメントがありますか。

館： 私はどちらかというところどこにも属していないという立場だと思うが、例えば段階評価でA+とかA++というのは組織にとって全然役に立たない。役立つのは、恐らく「ここがダメだ」とか「ここはこうしよう」とか、つまり後ろの方である。だから段階評価の指標の意味合いが自己評価と外部評価では見る側の受け取り方が違うから、こここのところの両面をどちら側から見るか、どちらから見ても役立つようにしたら機能しなくなること気づかされたような感じがする。そういう意味ではこのような対話していること自体がある意味で自己を高めていく営みだと思う。

長： ありがとうございます。この後指標や目標を作る中で指定管理者からも話があったが、時間も予算も人も限られているので、何か新しいことを力を入れてやるには何かを我慢しないといけないので、その辺も遠慮なくご提案されていくのがよいかと思った。

時間の都合上、次第4の「次回委員会並びにワークショップの開催」について事務局から説明をお願いしたい。

組： 資料1に示しているとおり、次回の事業評価委員会は来年3月の開催を予定している。内容は、ワークショップで評価指標を検討・作成し、評価指標で対象事業の検証を試行し、試行案のご検討をいただくことを考えている。

委員会の日程は、事務局より後日メールにて日程照会をさせていただく。評価指標のワークショップは現時点では11月から12月の間を予定している。出来る限り多くの方の参加をお願いしたい。事業評価委員にもお声がけさせていただく。日程は指定管理者と調整しながら決定していく。

長： ワークショップは何日間で行うのか。

組： 1日ないし半日を予定している。

長： 了解しました。

まだ少し時間があるので、言い残したことなどがあればお願いします。

指： 本当にこれを機に一人一人が自分のグループが何をすべきか、指定管理者として何をすべきか考える仕組み作りに取り組めたらと思う。

長： 今まで評価の時間ってご自身でどのくらいの時間を使っているか。評価にあまり時間を使い過ぎず、いかに効率よくやるかが大事だと思う。

指： 評価の前に事業報告書を作るのが、かなりの時間がかかる。

課題に思った点が、一部のリーダーが数字を入れて、そのリーダーだけがその数字を把握していることや、この評価にこの数字が使われていたこととかである。今は退職された前任者の役割になり、数字を入れたり、事業報告書から報告文を作成して、もう一人のスタッフと見直すとか、そういう仕組みになっている。みんなが我がこととして考え、何のためにその事業を行ったかが分かる仕組みが作れたらと思う。

委： 今おっしゃるとおり、現場は振り返りが大事である。今年度に計画していた事業について、実施後に定量目標や定性目標の検証をする振り返りがどれだけできるかがとても重要である。その前提として自分たちの成果を何で示すかということが直近で一番大事である。大変だがやっておいた方がよい。

委： 今の話で、大阪市立自然史博物館でJSTのプログラムの代表者をやっているが、振り返りの時間はプログラムの時間より長い。プログラムが終わった直後に細かなところから大きなところまで、次どうするかまで喋っている。それぐらい話し合うと意思疎通ができ、道が開けるのではないかと思った。

長： お互いに喋ることが大事ですね。

指： 取り扱う範囲が広がり、来る人も約20年前に比べ倍ぐらいに増え、スタッフもそのぐらい増えてたため、体系がなくなっている。以前は少人数でやっていたので、どのような段階と種類があるのか、何のために行うかがと

でも明確で毎回振り返りができたが、今は種類が増えて、体系がなくなると、何のためにやこれがどこに繋がるのかが分かりにくくなってしまったと思う。

個々のスタッフはそれぞれのところをベストにしようというところで止まってしまうと、せっかく良いものを行っているのに満たされない感じである。別の方向からダメ出しがくると、エンカレッジのために持っていた基準と効果が分からなくなり、直すところが分からなくなってしまうのもあった。今日いろいろな話を聴いて、20年くらいの変化の中で今ここにいるからやらなくてはいけないところは見えた。皆忙しくしているが振り返りの共有に時間を取らなければいけないぐらいに意識を変えないといけないと思った。

委： 今の話の中で、とても大事なキーワードは「体系化」。現場を忙しくさせすぎないことが肝である。極論を言うと、例えば将来像1に対して2、3個の目標を作ったら目標に必要な事業だけすればいい。既存の今あるプログラムから考えない。目標達成のためにプログラムが5つあるという発想で考えた方がよい。

指定管理者の提案書で書いている事業数や取組数が減ったとしても、この発想の方がより良く目標達成できるからという理由で済む。既存事業から考えてしまうから新しいプログラムを増やす話になる。担当者の思い入れや利用者に喜んでいただいているからということで既存事業を減らすのは大変である。中期目標を立てるということは事業を体系化してメリハリをつけるということ。その意識を持っていただくとよいと思う。忙しくさせすぎないことが重要。検討するのに時間はかかるが、実務が増えたり、何でやっているのかよく分からない事業などを見直すきっかけにしてもらえると良いかもしれない。

長： 余裕を持って取り組まないと継続性や将来性がないと思う。世代交代も難しいと思う。我々はベテランだからできるが、次世代の人たちに苦勞させたくないと思う。だからある程度適切な事業の進め方というのをぜひ考えてもらいたい。

以上で今日の議題は全て終了となる。令和6年度第2回多摩六都科学館組合事業評価委員会を終了します。

皆さん、今日はどうもありがとうございました。

次第4 次回委員会ならびにワークショップ開催について

(次第3 質疑応答の中で組合より説明が行われた。)

次第5 閉会